# 21［小説］『』

　私はのことを、いつかおじいさんと呼ぶようになっていた。それはお内儀や娘のよぶａクチグセにならったものであろう。苦しみがうすらぐと、私は丸薬をくれようとする遍路に、

「おじいさん、もう薬はいらん、痛みも治ったし、熱もない。」

　とこばんだ。黒い丸薬はけもののであったようだ。売薬でも胆薬がｂコウカなことを私は知っていた。私はその代金のことを考えていたのだった。①東京をたつ時、私は二度と東京へ帰るなどとは思ってもいなかった。私はｃトボしい持ち物いっさいを売りはらってかにまとまった金をつくっていたにすぎない。私は足摺岬でに身を投げればよかったのだし、遠い港町で十幾日もこうしてすごすなどということは考えていなかったことであった。自分が東京でつくった僅かな金も、清水屋のお内儀に既に十数日と重なった宿泊代を払うことすらおぼつかなくなっていたのを私は知っていたのだ。

「そんな青い顔をしていて、まだ治っておるものか。」

　遍路は②私の考えていることなどｄムシしてきすてるようにそういうと、丸薬を私の唇におしつけるようにしてのまそうとした。私はそれをこばみながら、やっと、

「おじいさん、私には、その薬代を払う金がない。」

　といった。遍路は［　　Ａ　　］私をみつめたが、何もいわず、丸薬を私に強いつづけた。だが金がないといってしまった私は、そういったことにすでに胸がたかぶっていた。薬をつかんだ遍路の手が私の唇にのびていた。かわいた、つやのない老いた手であった。私がなおも③かたくなに飲まぬと知ると、遍路は今ひとつの手で私の肩を［　　Ｂ　　］握った。そして、

「おぬしは飲めばよい。」

　といった。のからんだ声であった。

「おぬし、金などどうでもなることじゃ、おぬしに金のないことぐらいわしらにはようわかっておることじゃよ、わしらの眼はｅフシアナじゃないものな。」

　遍路はそういって、しばらく④言葉を区切っていたが、それから低い声で私をさとしでもするように、「⑤のう、おぬし、生きることはいものじゃが、生きておる方がなんぼよいことか。」

　と［　　Ｃ　　］いった。

●語注

遍路＝四国の弘法大師の遺跡八十八カ所を巡拝すること(人)。

お内儀＝商家の主婦。

足摺岬＝高知県南西端、太平洋に突出する岬。

問１　二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。2点×5

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問２　傍線部①について、なぜ「思ってもいなかった」のか。一〇字以内で答えよ。4点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問３　傍線部②「私の考えていること」とは何か。一〇字以内で答えよ。4点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　空欄Ａ〜Ｃに入る適当な語句を次から選べ。3点×3

ア　じろっと　　イ　ちらっと　　ウ　ぐっと　　エ　ぽつんと　　オ　ぽろりと　　カ　そっと

Ａ〔　　　〕　Ｂ〔　　　〕　Ｃ〔　　　〕

問５　傍線部③について。

（１）薬を飲まない理由を次の文に続いていく形で簡潔に答えよ。4点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕と考えているから。

（２）この部分から読み取れる「私」の人間性として最も適当なものを次から二つ選べ。2点×2

ア　誠実　　イ　勤勉　　ウ　純真　　エ　潔癖　　オ　大胆

〔　　　〕〔　　　〕

問６　傍線部④「言葉を区切っていた」とは、どうしていたことか。簡潔に説明せよ。4点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　傍線部⑤のように遍路が「私」にいった理由を簡潔に説明せよ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問８　遍路の人物像として適当でないものを次から一つ選べ。4点

ア　洞察力があり、自分の意志を押しとおす人物。

イ　宿屋のなじみだが、地元の者ではない人物。

ウ　かつては武士であり、辛い過去を持つ人物。

エ　強引で、人の気持ちなど考えずに行動する人物。

オ　ぶっきらぼうだが、底にやさしさを秘めた人物。

〔　　　〕

【解答】

問１　ａ口癖　ｂ高価　ｃ乏（しい）　ｄ無視　ｅ節穴

問２　死ぬつもりだったから（10字）

問３　薬の代金がないこと（９字）

問４　Ａ＝ア　Ｂ＝ウ　Ｃ＝エ

問５　(1)＝代金を払えないものは飲めない（傍線部の内容がなければ×）

　　　(2)＝ア・エ

問６　黙っていたこと

問７　「私」が死ぬつもりなのを察し、励ましたいと思ったから（傍線部の内容がなければ、それぞれ4点減点）

問８　エ

■覚えておきたい語句

□7　身を投げる……………投身自殺する。

□9　おぼつかない…………確かでなく、不安を感じさせるさま。

□14　強いる…………………相手の意思を無視して、無理におしつける。

□15　（胸が）たかぶる………興奮した状態になる。

□21　（眼は）節穴……………見落としたり、物事の意味を見抜く力のないこと。

〔場面解説〕

貧しさや病気、（そして父との不和に疲れ）生きる気力をなくした大学生の「私」は、自殺するつもりで足摺岬に近い商人宿「清水屋」にたどりつく。そこには老遍路（と行商の薬売り）が長逗留を続けており、いつしか「私」を見かねて世話を焼いてくれるようになる。

〈作者＆出典〉田宮虎彦（たみや・とらひこ）一九一一年（明治44）〜一九八八年（昭和63）東京生まれ。小説家。な社会や時代の犠牲者として生きた市井の人々の人生を愛情をもって描いた。主な作品として『落城』『絵本』『沖縄の手記から』などがある。本文の『足摺岬』は、『落城』とともに田宮虎彦の声価を決定づけた名作である。作中の老遍路は『落城』の登場人物の一人でもある。

【読みのセオリー】

★呼称に着目する

　登場人物をどのように呼ぶか、それを呼称という。

　たとえば、『羅生門』では、「下人」が楼の上に登っていく途中で「一人の男」と呼ばれ、呼称が変化している。どうしてその呼称で呼ばれるのか、なぜ呼称が変わるのかと考えることで、仕掛けが読めてくる。

　本文では、「遍路」の「おぬし」に着目する。

■読みのセオリー［実践］呼称に着目する

問７・８　遍路の人物像を読もう。

「私」は足摺岬に［１　　　　］しに来た。

　　　↓

遍路は「私」に、「生きることは辛いもの」と語りかける。

　　　↓

「私」が「生きること」を［２　　　　］と思っていることを、遍路は知っている。

　　　↓

遍路も辛い過去を持っている。

　　　↓

遍路は、「私」のことを［３　　　　］と呼ぶ。

　↓

遍路がかつての身分が［４　　　　］であったことを想像させる。

〔解答〕　１自殺（身投げ）　２辛い　３おぬし　４武士

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊差し替え

問２　傍線部①は具体的に何をしようと思っていたのか。そのことがわかる部分を文中から二〇字以内で抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

　［答］私は足〜かった（19字）

＊差し替え

問４　空欄Ａ〜Ｃに入る適当な語句をそれぞれ次から選べ。3点×3（Ａ12行目「やっと」、Ｂ14行目「だが」、Ｃ17行目「そして」を空欄に）

ア　それとも　　イ　そして　　ウ　やっと　　エ　だから　　オ　だが

［答］　Ａウ　Ｂオ　Ｃイ